

地域に根ざした池袋学の構築へ

阿部 治

東京芸術劇場と立教大学の連携講座として二〇一四年度にはじまった池袋学が、三年目を迎えた。私もその企画段階から関わってきたが、本年度は、渡辺憲司氏（自由学園最高学部長、立教大学名誉教授）から座長のバトンを引き継いだ。

渡辺氏は、二〇一五年度の講演録の巻頭に寄せた「池袋を知るために」という文章の中で「地域学」としての池袋学の意義について述べている。すなわち、人文科学・社会科学・自然科学を横断する学際性とフィールドワークによる主体的視座をもち、総合的に地域を対象とする学問が「地域学」である、と。

池袋学の三年間を振り返ると、毎回の講座は、非常に興味深いものであった。池袋に潜在する歴史や文化の一端を炙りだし、現在の課題の検討も含めて、多彩なテーマを抽出できたことは三年間の大きな成果である。しかし本来「地域学」としての意図をもってスタートしたものの、地域自体からのボトムアップの視点が、いささか不足していたようにも思える。おそらくそれは池袋というものを「地域」よりも、様々な「トピック」として捉えてきたためかもしれない。

「地域学」としての池袋学においては、現在の池袋を把握するだけでなく、過去の池袋をたどることは不可欠である。そのとき、過去を単に記述された記録として見るのではなく、当時の生き生きとした動きをも知ることによって、その時代にタイムスリップするような感覚を持ちたい。ただの知識としてではなく、過去の池袋を想像し、今とのつながりを考え、そし

て未来の池袋を思い描いてほしいのだ。この試みとして、今年は雑司が谷を夏季特別講座として取り上げた。

とにもかくにも池袋学を実施することで、地域を知る、考える、学ぶという原点に立ち返るための土壌は形成された。三年で一区切りという当初の予定どおり、池袋学は一度幕を引くが、もしも今後の展開を考えるとしたら、やはり「地域学」として池袋学をつくっていくための視点を、もう一回整理することが必要だろう。たとえば、座学的な講演と同時に、フィールドワークによって地域に根ざした人の話を聞き、様々な場所に足を運ぶ。そして現在の池袋の動きやダイナミズムを知る。そこで蓄積されるデータを残す際には、インターネットを通じてリアルタイムで情報の共有も可能である。豊島区郷土資料館などと協働し、リソースとなる資料とどう向き合っていくのかについても共に考えてみたい。

今後、池袋学が地域自体とのつながりを求めていく際、そうした作業の中で、池袋という地域が重ねてきた時間を、真にたどることができるのではないだろうか。

(あべ・おさむ 立教大学社会学部教授、同ESD研究所長、「池袋学」座長)